

るといふのを止めたのです。いまから思えばあれは父に何か予感があったのかも知れず、それを女の浅知慮でとめて、けっきょくはすべてを失う仕儀となったのを思い出すと、今でも胸が痛みます。

昭和二十年八月の敗戦後満州には新聞もラジオ報道もなくなり、内地の情報がほとんど入ってきませんでした。広島と長崎に得体の知れない威力を持つ爆弾が落とされたというのは聞かされましたが、二十年四月に、長崎の医科大学に入学していた弟の消息は翌年七月に引揚げてくるまでいっさいわかりませんでした。夏休みのことではあるし、多分長野県の上田にいる父方の祖父のところへ帰郷していたのではないか、引揚げたらきつと会えるといういちろの望みを托して、一か月近くにわたる引揚げの労苦に堪え、やっと親子四人、郷里の上田にたどりついたとき、初めて弟毅の死を知らされたのです。その時の両親の心の痛手を考えると、今でも涙を抑えることができません。

我家の敗戦の記憶

北海道 樋口良雄

昭和二十年五月十日四平専売署属官西安専売局勤務の私は、満州国の専売である石油類酒精などに特に揮発油に代わる代替燃料として酒精増産のため県内の醸造指定工場督励に廻り帰局すると県公署兵事係に至急連絡の板書を見た。まぎれもなく召集令状であった私は受領するとただちに妻に伝え、四平専売署副署長に報告併せて引継ぎのため職員の派遣と家族を四平市に引揚げる旨を連絡した。

妻は妊娠八か月の身で加えて長男は三歳の幼児のため満系職員のみ専売局に残すことは至難であったからである。引き継ぎも終り大半の荷物も取纏め起立して見送る職員を後に四平市を十四日に出発。副署長を始め先任職員に後事を依頼し夕刻の混雑する指定列車で翌五月十五日東安省平陽満州第一二八師団通信隊に無事入隊し

た。

連日の訓練は厳しかった。特に移動して仮設兵舎を設営起居した期間は入浴した記憶はない。八月九日未明、平陽飛行場のソ連機による爆撃と共に通信部隊は行動を開始した。

司令部と部隊指揮所の有線の確保に牡丹江、海林周辺の作戦に従軍する、十七日と記憶するが横道河子付近に於て激しい機銃掃射と砲撃を受けたが日本軍の反撃は全くなかった。野宮と仮睡続きの十八日朝数カ所から手榴弾の炸裂音が響いた。指揮者の自決であった。その後日本降伏を知らされ武装解除を受ける。

海林の輜重隊馬屋に仮泊した部隊は、牡丹江小城子、綏芬河を経てソ連領にはいった。一か月程度監視下の野営生活を終えて有蓋車に積み込まれバイカル湖を経て更に北上、二週目くらいに貨車から降りると徒歩二日天幕張の仮設收容所にはいり小屋造作に従事、年末頃更に数日移動して山林地帯の丸太囲い小屋数棟と監視塔鉄条網に囲まれた收容所で丸太の運搬作業であった。

終日続く極寒地の労働で強度の栄養失調に陥り加えて

凍傷のため足指二指切断した。病院に收容加療の機会を得たことを今幸運と思う私である。二十一年秋病弱兵として北鮮平壤近郊の二合里に移送されその後興南港より乗船、佐世保に復員したのは昭和二十二年三月二十三日であった。

召集で別離の家族は四平市の義父居宅で義弟夫婦と共に同生活を始めた。七月三十日次男を安産、土爺廟煙草組合所長の義父も対面してくれた又給料も署から毎月届けられていた。

しかし出産二週目で日本の敗戦となった。銀行預金封鎖前日ようやく千円の限度額を払い戻しこれを引揚げまでの生計に充てたのである。

昭和二十一年四月ソ軍は撤兵し代わって共産軍が入城、同時に満州に進出し北上する国府軍は五月上旬四平市を占領した。国、共両軍の戦闘のため男子は暫壕掘に酷使され、家では畳を窓側に立て付けて流弾の防止に努めたが、その都度かなりの死傷者がでた。

四平市の居留民は隣り組毎に編成されて引揚げ決定、出発は七月五日となった。

しかし次男は胃腸障害のため、諸種の手当もむなしく七月三日死亡した。引揚げを目前に控え慌ただしく火葬に付し弁当箱に納棺して持ち帰ってくれた。

居留民は無蓋車で奉天、錦西を経てコロ島より乗船し昭和二十一年七月二十四日舞鶴港に上陸した。

赤黒く日焼けし乞食姿の親子はこのようにして漸く故郷旭川に辿り着いた。

私は復員後約一年、生家で休養、その後公務員に再就職した。昭和五十四年退職して余生を送っている。去来する思いはあの悲惨な戦争の終末である。

満州からの引揚げに思う

北海道 村山 八代子

昭和八年から東満総省鶏寧密山の満州炭鉱株式会社
に水道、暖房技術員をしていた主人は肺結核のため、一時療養で休職していたが、二十年の八月八日再出勤し間もなく夫は慌ただしく帰ってきた。その顔にただならぬ

ものを感じました。

今日未明会社が機銃掃射でやられた。日ソ戦が始まった。社員全員牡丹江に集合軍隊に所属するようにとの当局の指令あり、家族は急遽安全地帯へ避難するようにと言ってまた会社へ戻った。第二次大戦の最中とはいっても今までは割合のんびりと暮らしていた私共も突然のことで何が何やら考える暇もなく、とにかく身の回りのものをまとめて、といっても生後八か月と五歳、八歳の子供達では衣類どころかオムツその他でやっとです。

不気味な爆音に何も知らない五歳の子は防空壕から飛び出して慌てさせたものです。

人間ショックを受けると米の飯も砂を噛むのと同じ自然味がないということを知りました。勿論当時は電話があるわけでなし、その度に主人の伝言で、女子供は駅まで急ぎ集合とのことで、とりあへず四キロ近くの暑い山道を急いだ。

あのころは会社自治ということもあってどこへ行くにも団体行動であったから或る程度の混乱は免れたと思う。これが現代のような自己主義な世の中ではより多く